

# 人権ほっと29年6月号

この世界の片隅に

大阪教育大学教授

堀 薫夫

昨年の映画の世界ではアニメがヒットしたが、じつはそれらは人権にかかわる重い問題を背後にかかえていることが多い。例えば最大のヒット作品であった「君の名は。」も背後に原発問題への含蓄を忍ばせているといえる。「聲の形」は聴覚障がい者へのいじめ問題と正面から向きあうものであったし、「この世界の片隅に」は人権侵害の最たるものである。戦争問題を扱っている。

「片隅」は現在では多くの賞を受賞し注目されているが、公開当初は上映館も少なく、私は尼崎市のやや小さなシアターに行って観賞をさせていただいた。人権問題との関連ではまず、主人公の声優の（＝能年玲奈）が本名を用いることができないという問題が注目された。理由がどうあれ、自身の本名が使えないこと自体が人権侵害だろうが、ここで注目したいのが作品の

描き方である。

すでに他所で語られている点ではあるが、本作品の最大の特徴は戦時下の市井の人びとの「日常生活」を、丹念にかつ正確に描いたという点であろう。それも家族での食事などの光景を中心に。そこには戦争反対への主張やその悲惨さを前面に押し出すという手法はない。しかし、ただ果てしない日常を描き続けることが、「結果として」戦争のもたらす人権侵害を描くことに通じていく。

同様の手法で想起されたのが「ダウン症（の子をもつ）家族のルール効果」研究である。ダウン症の子をもつ親たちが自身の家族の日常生活写真を公開し、病気の分類そのものと偏見を変容させていくとする研究である。

日常生活を正確に描き続けることをとおしての人権啓発という手法。そこには扇情的なアジェンションをこえる、日常生活のリアリティの重さがある。